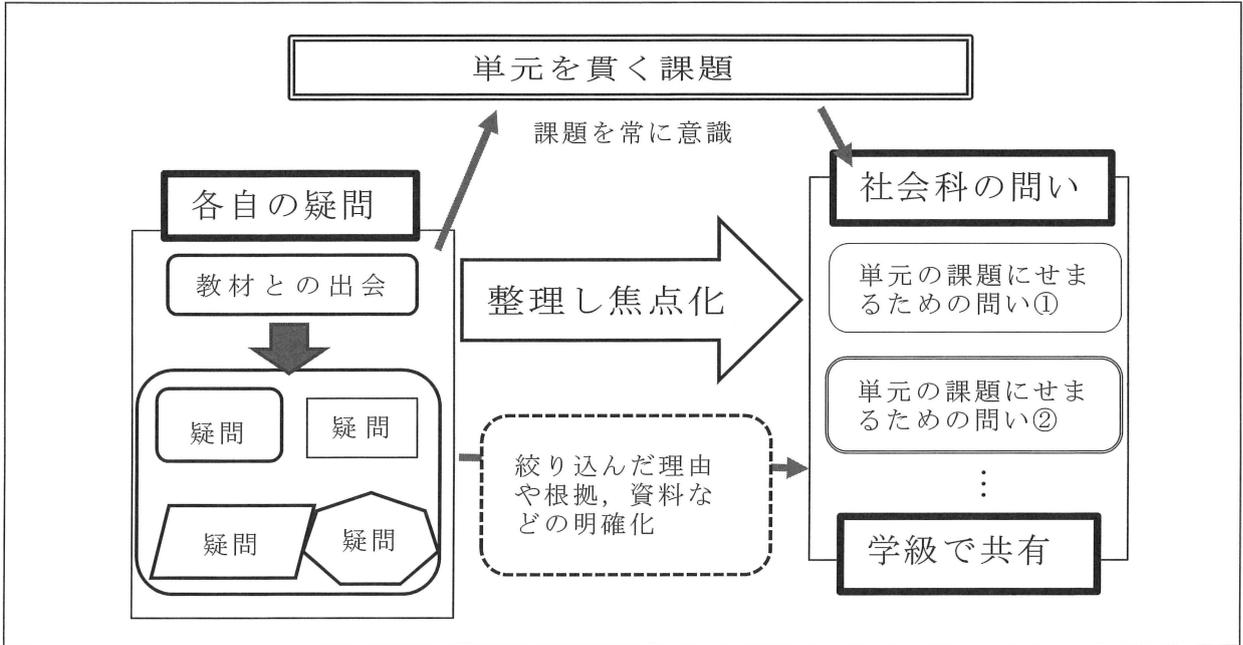
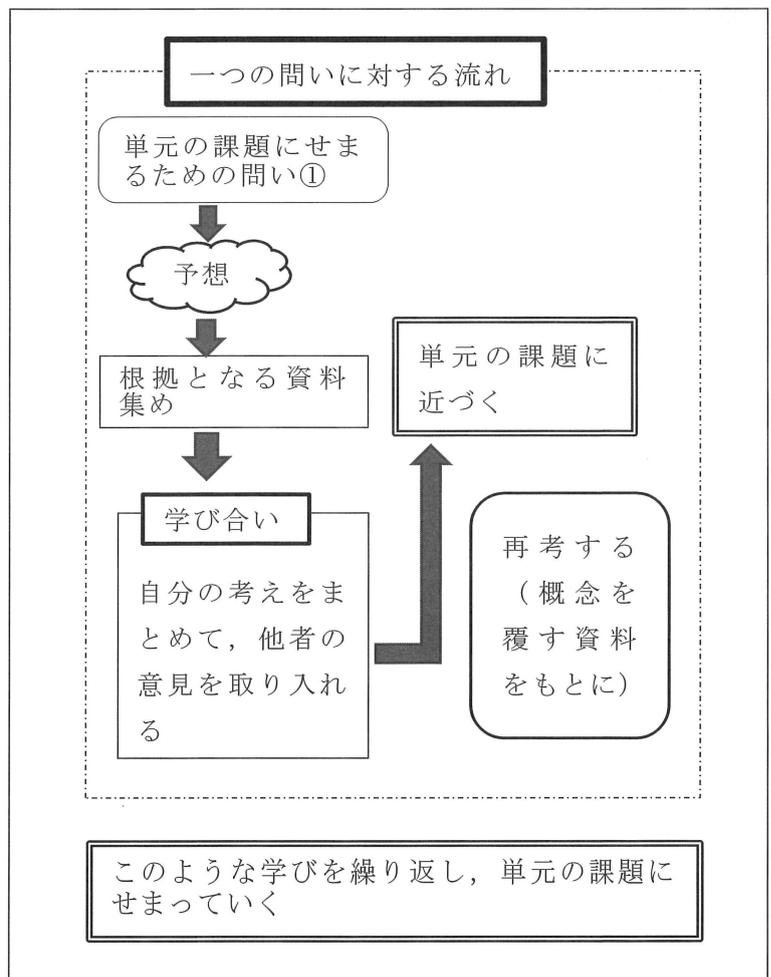


1 社会科における「問いをもち追求する姿」



社会科における「問いをもつ」とは、まず教師がはたらきかけとして、子ども一人一人へ「なぜかけ」や「比較」という手立てを施し、子どもが教材と出会うことから始まる。そして、各自が疑問をもつ。社会とのつながりがあるものを社会科の疑問と定義している。教師が単元の課題を提示し、「なぜ、この課題を解くのか?」「どのように解決するのか?」を自分とのつながり、社会とのつながりから導き出し、単元の課題を解く切実性や必然性を生み出す。

次に、単元の課題を解決するための疑問を整理する。この場面でも単元の課題を解く切実性や必然性を話し合い、どの疑問を解決すれば単元の課題を解決できるのか予想し、疑問を絞り込み、焦点化する。この単元の課題を解くために、絞り込んだ疑問のみを社会科の「問い」と定義した。そして、単元の課題を解いた



めの「問い」が複数でき、授業が構成されるようになる。

子ども一人一人が疑問をもち、単元の課題に迫る「問い」を解決し始めることから追求が始まる。予想し、自分の考えの根拠となる資料を探し、自分の考えをまとめる。そして、集団の中で、自分が考えた解を発表し、他者の意見を取り入れながら、自分の解を再考する。いくつかの問いに対して、この過程を繰り返し追求していく。各々の解が出たところで、単元の課題の解を求める探求が始まり、自分の解をもつ。その後、これまでもっていた概念をくつがえす資料に出会うことで、「今の解で新たな事実に対応できるのだろうか。」と再考をする。そして他者と協働して、社会の状況や社会的事象の要素の変化をとらえることで新たな解を創り出す。これが探求であり、思考が広がり深まることが期待できる。最終的に、自分のくらしや生き方につなげていく。

そこで社会科では、次のような子どもの育成を目指すことにした。

- 社会とのつながりの中から様々な「問い」を創造し、社会的事象を自分のこととして、探求しようとする姿
- 社会的事象と自分とのかかわりを明確にして振り返り、これからの自分のくらしや生き方につなげていこうとする姿

2 「問いをもち主体的に追求する姿」を求めて

「主体的に追求」するためには、いくつかの教師の手立てが必要である。手立てとは、めあてに向かって思考を広げ深めていくための支援である。また、社会科は、社会で起こる問題を自分のこととしてとらえ、課題の本質を探究する学習活動が多い。そこで(1)~(4)の場を単元に設定し、そこで考えられる手立てを考えた。また、それぞれの場でどのような手立てを講じられるか教師が見通しをもてるようにした。

(1) 新たなもの（人物、資料、教材、体験など）と出会い、「問い」をもつ場

- ・ 前単元や領域から獲得した概念をゆさぶったり、新しい情報や矛盾する事象と出会ったりすることで、単元の課題につながっていくようにする。
- ・ 単元の課題は、子どもが解く切実性や必然性を見い出せるものにする（めあて）。

(2) 「問い」の解を予想し、根拠を集め、単元の課題の解に迫る追求の場

- ・ 子どもが「問い」から課題の解決へとつながるように、板書（ノート）は子どもの思考を整理・分類したものにする。
- ・ 子どもが習得した知識や技術を活用し、根拠をもって、事象と事象とのつながり、また、事象と自分とのつながりをとらえることができるようにする。

(3) 社会の状況や社会的事象の要素の変化をとらえることで新たな解を創り出す場

- ・ 他者と協働し、自分が出した解を再考することで、新たな解に向かって探求する。

(4) これからの自分のくらしや生き方とつながるふりかえりの場

- ・ 自分の考えを広げ、深め、まとめるために、単元を通して振り返ることができるようにする。

（文責 岡田 昭彦）